

Title	「上泉徳弥関係文書」 解題及び目録
Sub Title	Kamiizumi Tokuya papers
Author	上泉徳弥関係文書研究会(Kamiizumi Tokuya Papers Research Group)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1999
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.72, No.1 (1999. 1) ,p.101- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19990128-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

「上泉徳弥関係文書」解題及び目録

上泉徳弥関係文書研究会

- I はじめに
- II 上泉略歴
- III 解題
 - 一 中国革命関係
 - 二 日清戦争・日露戦争関係
 - 三 国風会・国体館関係
 - 四 軍縮関係
 - 五 手帳・日記
- IV 文書目録
 - 一 中国革命関係
 - 二 日清戦争・日露戦争関係
 - 三 国風会・国体館関係
 - 四 軍縮関係
 - 五 日記・手帳

「略歴」

I はじめに

上泉徳弥関係文書は、御令孫上泉徳雄（塾員）氏が自宅に保管していたものである。今回紹介する上泉文書はメモ、書類および日記・手帳だけでも総数一八八点に及ぶものである。これら一八八点の文書を便宜上、一、中国革命関係、二、日清戦争・日露戦争関係、三、国風会・国体館関係、四、軍縮関係、五、日記・手帳の五項目に分類、整理した。また、この他に多数の書簡およびパンフレット類が存在している。

上泉文書は日記・手帳を除くと、自筆メモと書類がほと

らんどであるが、公式書類よりは、自筆メモに注目すべきものが多いのが特徴である。特に中国第三革命に関するメモには、今まで明らかにされていなかった政府の対応に関する新史料も含まれており、貴重な文書であるといえよう。また、日露戦争開戦前夜の対露強硬派の動きを記したメモなどが数点みられ、湖月会成立の経緯を伺い知ることができ。上泉が会長を務めた国風会と同会の活動の一環である国体館建設に関する史料は一〇六点にも及び、同会の活動を示す貴重な史料となっている。

今回は都合により書簡、パンフレット類は割愛した。ここで紹介したもの以外にも上泉史料は多数存在しており、今後、機会をあらためて紹介していく予定である。

II 上泉略歴

上泉徳弥(以下上泉とする)は、慶応元(一八六五)年九月二五日、山形県米沢市袋町に生まれた。父清次郎(上泉家の次男)には、はじめ子がなく、小島直蔵を迎え養子としたが、その後妻である安子との間に男の子が生まれた。この男の子が徳弥である。父清次郎は、徳弥が二歳のときに死去し、義兄直蔵が家督をついだ。直蔵にはすでに

長男幸吉(徳弥にとっては甥にあたる)がおり、徳弥はこの幸吉とともに義兄の薫育を受けた。直蔵は若いころから漢学に秀でていたという。彼は私立中学校で三〇余年にわたり教鞭をとり、地元米沢では篤行の学者として知られた存在であった。徳弥はこの直蔵の影響をかなり受けて育った。

上泉は八歳のとき米沢の興讓館に学び、その後学制の改正により、西提小学校、同中学校へと進んだ。ここで後に海軍兵学校で同期となる釜屋忠道(後の海軍中将)と親交を結んだ。上泉は学業成績優秀で常に首席であったという。同中学卒業後は、上京して海軍の予備校というべき攻玉社に入学した。

明治一四年度は募集がなかったため、上泉は翌一五年に海軍兵学校を受験し、応募者三〇〇名余に対し、合格者二二名という激戦をくぐり抜け見事合格した。同期には江頭安太郎がいるが、江頭は常に首席であったという。一八八年秋、練習艦筑波に搭乗して国内を巡航し、翌一九年には同艦にてオーストラリア、ニュージールランド、フィジー、サモア方面を経て、ハワイへの航海を体験している。同年一二月、上泉は兵学校を優秀な成績で卒業(卒業生一九名)し、海軍少尉候補生として浪速乗組となった。

明治二十一年一月一三日、上泉は海軍少尉に任ぜられ、武蔵分隊士となった。明治二十四年には海軍大尉となり、二六年、高千穂分隊長に任ぜられた。同年、郷里米沢において、五十嵐力助の長女久子と結婚した。この時、徳弥三一歳、久子一八歳であった。

二十七年三月、海軍大学校学生となり、おりからの日清戦争に際しては運送船監督将校を命じられた。戦争中は大連要港部副官となり柳樹屯に赴任した。日清戦争は日本の勝利に終わったものの、戦後の三国干渉により、遼東半島を清国に返還せざるを得なかったことは、上泉にとつて痛憤やるかたないことであつた。

二十九年四月、上泉は海軍大学校学生となった。在学中の翌三〇年一二月に少佐に昇進し、同月海大将校課程を卒業すると、水雷術練習所にて修学することとなった。三一年にはイギリスで建造中の敷島回航委員を命じられ、イギリスに出張している。三三年、上泉は海軍中佐に昇進し、千代田副将となった。翌三四年二月には佐世保海兵団副長となり、同年六月には竹敷要港部第一水雷敷設隊司令および第二水雷敷設隊司令に補せられた。

三五年三月、高砂の副長となり、イギリス国王エドワード七世の戴冠式に出席するため、檣艦浅間とともに出発し、

同年一月に帰国した。

日露関係が風雲急を告げる中、三六年上泉は軍令部第一局局員兼副官に任ぜられている。陸軍からは田中義一中佐が海軍との連絡掛に任ぜられた。これを機に上泉と田中の交流が深まっていったようである。二人を中心に、参謀本部や軍令部、外務省の中堅クラスとの交流を目的とした星桜会という組織が形成された。この星桜会では活発な議論が交わされることが度々であつたという。

またこの動きと並行する形で、同年五月、湖月会が組織された。これは対露開戦派グループのひとつで、参謀本部、軍令部、外務省の対露強硬派を中心とし、民間の対露同志会とも連携していたことが明らかとなっている。

三七年、日露戦争が始まると、上泉は第二師団が遼東半島に上陸する際の輸送業務に従事することになったが、奇しくも満州総司令部に赴く井口省吾少将も同船していた。

上泉は戦争末期における樺太作戦の際にも、支援部隊に参加している。

三八年一月、上泉は海軍大佐に昇進、同年一二月浪速艦長に補せられた。上泉はこの浪速艦長時代に、伊藤博文韓国統監の帰国や伏見宮博恭王の清国訪問に従事しており、その際北京で西太后に対面したことを詳しく記録に残して

いる。三九年一月には吾妻艦長に補せられ、四一年の米
国大西洋艦隊来航の際には、生駒艦長として米艦隊の接
待を命じられた。

翌四二年一月には、薩摩艦長兼横須賀海軍工廠艦装員に
補せられた。同年一月、海軍少将となり、大湊要港部司
令官に任ぜられている。上泉は同地を太平洋を越えてアメ
リカと日本を結ぶ要港とみなし、ここに一大港湾地を築こ
うとしていたようである。大湊興業株式会社の鈴木誠作と
親交を結ぶのもこの頃である。

四四年九月、上泉は鎮海防備隊司令官兼臨時海軍建築部
支部長に任ぜられ、鎮海に赴任した。この地で上泉の力量
は遺憾なく発揮されたようである。上泉は赴任にあたり、
鎮海を東洋一の大要港とする希望をもっていた。同地の発
展に期待を寄せている日本企業も多く、同地の海軍用地を
賃借したいという企業が後を絶たなかった。上泉はこうし
た企業に公平に接していたようであるが、企業の利権がら
みの抗争に巻き込まれ、左遷の憂き目を見ることとなった。

その後、上泉は四五年七月に横須賀水雷団長に、大正二
年四月横須賀水雷隊司令官に任ぜられている。同大正二年
八月に第一艦隊司令長官、九月には大正二年度海軍小演習
青艦隊司令官、一月には佐世保水雷隊司令官となり、同

年一月待命、翌三年一月、中将に転補すると同時に予
備役となった。

退役後、郷里米沢では衆院選立候補を勧める声もあった
が、上泉はこれを断わり、以後は大陸とくに中国問題に関
心を寄せるようになった。なかでも上泉は第三革命へ深く
関与しており、そのため「上泉文書」でも第三革命関連の
史料には興味深いものがみられる。

大正七年五月、宿願であった『大日本主義』を著し、海
軍の軍備拡張を主張した。この頃より、上泉は講演会に飛
び回ることとなった。大正一〇年に国風会の会長に就任す
ると、国風会の組織改編、強化に乗り出した。「上泉文書」
の後半史料はほとんどがこの国風会関連のものであり、上
泉がいかにか熱心に取り組んでいたかが推察される。

一一年一〇月、華族会館において国風会顧問会議が開か
れ、資金調達問題について討議された。同会の顧問には平
田東助内大臣、清浦奎吾枢密院議長、出羽重遠海軍大将、
渋沢栄一ら各界の有力者が就任し、彼等の尽力により三井、
三菱などから資金援助を受けていたようである。大正一二
年の紀元節に、国風会発会式を予定していたが、伏見宮親
王死去により発会式は延期となった。また、関東大震災に
際しては、麴町の本部が全焼するなどの不幸に見舞われた

が、この頃には会員数も一〇、〇〇〇人を越え、同会も順調に活動を展開していたようである。

昭和に入ると、上泉は国風会会長として多忙な日々を送った。排日問題や軍縮問題に際しては、他の右派グループとも連携しながら、政府の対応を非難し、特に昭和五年のロンドン軍縮条約調印のときには軍縮国民同志会に参加し、国民大会で熱弁をふるった。

昭和六年一月、相撲協会会長尾野実信大将らの協力を得て、国風会一〇周年記念大会を国技館で開催した。同年、満州事変が勃発すると、上泉は星桜会において満州事変を是とし、政府を鞭撻する決議を行い、さらに各政党政派を横断する挙国一致の満蒙問題国民大会の開催に尽力した。

昭和八年、日本が国際連盟より脱退すると、上泉は頭山満、内田良平らとともに政府の鞭撻演説会を開催し、政府支持を表明した。またこのころ上泉は共產主義撲滅運動にも従事している。昭和一〇年五月、「遼東還付四〇周年を迎えて」と題する上泉の演説がラジオを通して全国放送された。また、国風会主催で日清戦役、遼東還付四〇周年記念慰霊祭、並びに講演会を挙行した。昭和一二年には『国家総動員』なる著書を刊行し、近衛内閣の国家総動員声明に対する国民の理解を深めるべく努力している。こうした

時局下、昭和一五年五月、上泉は放送局より講演を依頼され、「日露戦争史話——運輸の苦心を語る」と題したラジオ講演を行い、日露戦争当時の回顧談を語った。

すでに述べた通り、上泉は国風会会長に就任して以来、同会の中心となりさまざまな活動を支えてきたが、上泉が同会の活動の中で最も力を注いだのが国体館建設事業であった。天皇機関説が巷間においても議論されるようになった昭和一〇年頃から、上泉は皇紀二六〇〇年記念事業として日比谷議事堂跡に国体館を建設することを画策し、各方面に働きかけている。国体館の具体的内容は不明であるが、世界に類を見ない大日本帝国の国体を天下に誇示し、世界の人類を啓発しようというのが国体館建設の趣旨であり、上泉の大日本主義を具現化したものと推察される。結局、建設敷地を確保することができないうちに、日本は太平洋戦争に突入し終戦を迎え、国体館建設事業も立ち消えとなつてしまった。

昭和二〇年八月一五日、終戦の報を聞いた数名の特兵が上泉宅を訪れ、決起すべきや否やと上泉に詰め寄ったところ、上泉は「聖断の降りたる以上、上御一人の御仰に従うべきである。」と将兵らを諭したという。翌二十一年一月二七日、上泉は明治・大正・昭和にわたる波乱万丈の人生

に幕を引き、永遠の眠りについた。享年八四歳であった。

以上のように上泉の略歴を振り返ってみると、多数存在する上泉文書の中でも特に注目されるのは、以下の三つの部類に含まれる文書であると推察される。その第一は中国革命への関与を示す文書であり、とりわけ袁世凱打倒に従事した右派グループの動向や袁世凱死去にあたっての政府、右派グループの対応を記した史料がいくつか散見できる。

第二に注目されるのは、日清戦争・日露戦争関係の文書である。現役将校として参戦した上泉が記した史料から、戦争の推移や教訓を読み取ることができる。第三には、上泉が晩年力を注いだ国風会・国体館関係の文書があげられる。国民精神の綱紀肅正を主張する上泉がこれらの運動を通して、右派グループの論客となっていたことが理解できる。

以下は上泉文書の解題とその目録である。なお、上泉徳弥関係文書研究会の構成メンバーは池井優、上泉徳雄、波多野勝、飯森明子、の四名である。

III 解題

一 中国革命関係

中国革命関係文書の中には、辛亥革命関係のものと同第三革命関係のものが含まれる。辛亥革命関係のものはわずかにメモが一点みられるだけであり、中国革命関係文書のほとんどは第三革命関連のものに集約される。袁世凱打倒を目的とする第三革命に際しては、日本は南方北方の両グループに対して関与していたが、上泉文書では北方グループ、特に蒙古軍（パプチャブ將軍）に関する記述がみられ、第三革命に際して、上泉が北方グループの動きに積極的に関与していたことを裏付けている。

一―二―一「秘・石井外相ト会見顛末」は、袁世凱死去後の対中政策について、石井外相と会見した際の内容を記したものである。会見の際、上泉は南北分立論を主張し、そのため日本政府が積極的に関与し事態の收拾を計ることを提言している。一―二―二「時事鄙見」は上泉の友人である宮島大八の手になるメモである。このメモにおいて宮島は南北分立論を唱え、北方には肅親王を擁立し帝政を施

行し、南方には共和制を施行することを提言している。一
二一三は寺西秀武との会見内容をまとめたメモであるが、
四国借款に反対して日支合弁企業の設立を提言するとともに、
黎元洪、段祺瑞、徐世昌らの人物評価が記されている。
一一二四は田鍋安之助、佃信夫、内田良平らとの会見内容
を記したメモである。袁世凱没後の混乱状況に際して、
右派勢力の間でも種々の意見が輩出し、その調整が困難で
ある様子が伺える。

一一二五のメモにおいて上泉は、袁世凱の死をむしろ
歓迎する旨を述べ、また大隈内閣の対中政策については
「大隈ノ処置悪シキニアラス徹底セザリシ為最モ悪事ニ終
ワレリ」と批判している。さらにここでも日中合弁企業の
設立を提言しているが、それにより中国動乱に際して出兵
する口実になるとしており、上泉の強硬な対中姿勢を示し
ている。一一二六のメモでは「支那ノ政局ハ如何ニ変移
スルヤ予知シ難シ」として、当面は「傍観」すべきこと、
また中国において共和制は無理であることを述べている。

一一二一〇のメモには、パプチャブ軍の後始末に関す
る記述がみられ、パプチャブ軍に関する日本側の対応を明
らかにする新史料である。一一二一二は肅親王から上泉
宛の電報とそれに対する返電である。時局に関し教えを乞

いたいという肅親王に対し、上泉は四、五日中に出向く旨
の返電を送っており、両者の親密な関係の一端が伺える。

二 日清戦争・日露戦争関係

日清戦争関係の文書には、当時のメモもさることながら、
後日の回顧メモが多く含まれる。当時のメモは戦況を断片
的に記したものが多く、回顧メモは当時を振り返り、時間
の経過にしたがい記述したものがほとんどである。

二一一二「日清戦争思出」は、日清戦争の開戦から講
和、その後の三国干渉に至るまでを詳述している。二一一
一三「黄海海戦メモ」（筆者不明）は、同海戦の経緯を記
したものである。二一一一〇以下の回顧メモは、日清戦
争と日露戦争をいっしょに記述したものである。

日露戦争関係の文書にはいくつか注目すべきものが見ら
れ、上泉が日露戦争前後において活発に活動していたこと
が伺える。

二一一一「夜話ノ秘」は対露強硬派であった上泉が、
山本権兵衛海相と面談したときの内容を記したものである。
上泉は山本海相と三回にわたり会談し、対露開戦などを主
張している。これに対し山本海相は、対露開戦のための大

義名分が不明確なこと、また戦争に際しての財政的裏付けが確保し難いことなどについて反問しており、興味深いメモである。二二―二四のメモにおいては、紅葉館において

陸海軍合同の懇談会がもたれたことなどが記されており、湖月会成立の経過が伺える。二二―二八には日本海海戦の経過が細かく記述されている。二二―二九「山王ノ三河台

ニテノ話」は、三河台の山座円次郎外務省政務局長の自宅において密議した際のメモと推察される。二二―二一「旅順ニテ乃木將軍ニ別レ東郷大將ニ約意セシ時ノ次第別記」は、旅順攻防戦をめぐる陸軍と海軍とのやりとりの一端を伺わせるものである。旅順攻防戦は海軍の強い要望のもとに強行された。海軍は日本海の制海権を握るためには、旅順港のロシア艦隊を叩くことが必要と考えていた。旅順要塞が日本軍の手に落ちれば、陸からロシア艦隊を攻撃することが可能となる。そのため海軍は乃木希典第三軍司令官に対して、一日も早く旅順要塞を攻略するよう働きかけた。この文書はその際の東郷平八郎と乃木のやりとりの一端を記したものである。

二二―二一三は北清事変から日露戦争までを回顧したメモであるが、当時の情況とともに上泉の行動がかなり詳しく記されており、北清事変のおり上泉が陸軍の輸送援助に

尽力したこと、日露開戦前の対露強硬派の動きや湖月会成立の経過、日露戦争の詳しい経過などが述べられている。

三 国風会・国体館関係

三―一 国風会関係文書

上泉文書の中には、国風会及び国体館関係のものが多数見られる。三―一―二一「国風会要覧」および三―一―二五「国風会趣意書」から同会の組織および活動を伺うことができる。国風会は大正九年に創設された教化団体で、江藤哲二を会長、山本峰吉を理事として青年の教化啓蒙のための活動を行っていたが、大正一〇年に上泉が同会の会長に就任してからは、東京麴町に本部を構え、組織を改編し、大々的に活動を開始した。かねてより上泉が提唱していた「大日本主義」を発揚し、「皇祖以来ノ國風ヲ進メ正義人道ニ基キ世界ノ平和ヲ完成スル」ことが国風会の主目的であり、その為に図書雑誌の刊行、講演会、活動写真会の開催などを行っていた。上泉は同会の会長として、講演会のため日本全国を訪れるなど、多忙な日々を過ごしていたようである。国風会関係文書の中に多数の演説草稿がみられるのはこうした理由によると推察される。

上泉の提唱する「大日本主義」とは、「萬世一系ノ皇室ヲ中心トシ忠孝ヲ励ミ勤儉力行ヲ旨トシ國民思想ノ善導統一ト國力ノ充実」を企図し、かつ、世界に類を見ない大日本帝国の「皇道」を世界に広めることを企図するものであった。

昭和一〇年頃の段階で、国風会の会員は約一七、〇〇〇人を数え、顧問には清浦奎吾、金子堅太郎、上原勇作、渋沢一らが名を連ね、また会員の名簿にも学者や代議士の肩書きをもつものが多くみられる。活動資金は会費や寄付金などで賄われていたようであるが、政府や内務大臣からも補助金を受けている。

国風会関連の文書は、同会発行のパンフレットや印刷物の類がほとんどであり、メモは原稿の下書きや幹部間での議論の内容をまとめたものが多い。国風会発会式が行われた大正一二年頃と国風会一〇周年に当たる昭和六年頃に史料が集中しており、また、他の右翼団体や右派グループとの関連を示す史料もいくつも見られる。その他にも共産主義撲滅運動に関するメモ等が若干見られるが、これは同会の性格を表しているといえよう。

三十一 国体館建設関係文書

国体館建設事業は国風会の活動の一環であり、上泉が晩年において最も尽力したものである。国体館建設関係文書の数の多さからも、上泉が活発に活動を展開したことが推察される。以下では上泉伝に掲載されている手記「国体館建設ニ関スル発端並ニ経過」をもとに、国体館建設事業の発端から結末までの経過を簡単に振り返ってみる。なお『上泉徳弥伝』は昭和三〇年に長澤直太郎氏の編纂により刊行された上泉の伝記であり、その資料編纂には甥である上泉貞吉や元国風会副会長の江藤哲治らが協力している。

昭和一〇年、美濃部達吉の天皇機関説が世間を騒がせるようになると、それに危機感を覚えた上泉ら国風会幹部は、国体館建設計画を画策し始めた。そもそも発端は、上泉が斉藤実大将を訪問したおり、「国体ヲ明徴ニスル実物教育学校トシテ国体館ヲ建設」する必要があることを述べ、斉藤がこれに同意したことであった。その後上泉は、斉藤実、金子堅太郎、清浦奎吾らに尽力を仰ぎながら、各方面に働きかけるとともに、計画の骨子を堅め、昭和一〇年一月に岡田啓介首相に建議案を提出している。この建議案の内容は、皇紀二六〇〇年（昭和十五年）を迎えるにあたり、その記念事業として日比谷議事堂跡地に国体館を建設

し、「萬世不易ナル世界唯一ノ我國体ヲ天下ニ誇示スル」とともに「八紘一字ノ神慮ヲ宇内ニ表現シ以テ世界ノ人類ヲ啓発」しようというものであった。皇紀二六〇〇年記念事業委員会（委員長阪谷芳郎）の賛助もあり、国体館建設事業は順調に進展していたかにみえた。

しかし、ここで思わぬ事態が持ち上がった。国体館の建設予定地と考えていた日比谷議事堂跡地に通信省の建物を建設する予定であることが判明したのである。これ以降、上泉は建設予定地として議事堂跡を確保するために、文字通り奔走することとなった。上泉は岡田首相をはじめ、文部省や大蔵省に通信省の建設予定地を変更するよう働きかけている。昭和十一年二月、二・二六事件により岡田内閣が倒れ、広田弘毅内閣が成立すると、貴衆両院に請願を提出、また、中央教化団体連合会の名で政府に建議を提出するなど、以前にも増して活発な運動が展開された。しかし、広田首相は議事堂跡地に通信省を建設することを決定、議会においても承認され、建設工事が一部着工された。こうした状況下で、上泉は大蔵省、文部省、関係各団体および新聞社らに働きかけたが、状況は改善されなかつた。

その後、近衛内閣のときに、大蔵省は通信省の建設を取りやめ、議事堂跡に国体館を建設することを承諾したが、

敷地の規模に関して折り合いがつかず、結局うやむやのまゝ事態は推移し、ついに皇紀二六〇〇年を迎えた。政府が国体館という名称を採用せず、仮称国史館としたことも大いに上泉をいらだたせたようである。昭和十五年、皇紀二六〇〇年を迎えるにあたり、上泉は「敷地問題並ビニ館ノ名称モ未解決ノ俛二千六百年ノ式典ヲ見ルニ至リシハ、私ニトリテハ実ニ終生ノ恨事ニ有之申候」とその心中を語っている。この後も、上泉は国体館建設のため奔走するが、日に日に厳しさを増す戦局の中、ついに国体館は実現せぬまま終戦を迎えた。

以上が国体館建設をめぐる経過であるが、国体館関係文書の中には、いくつかが注目すべきものが含まれている。メモは関係者との打ち合わせ、会見の内容などを記したものが多く、書類は各省庁や関係団体にあてたもの、経過の報告などがほとんどである。史料の多さから、国風会が国体館建設に重点をおいていたことが伺える。

三一―二四「^{（マヤ）}阪谷男へ報告ノ際」は、皇紀二六〇〇年記念事業委員会の委員長であった阪谷芳郎に面会した際のメモである。三一―二八では名称問題に関して、近衛文磨首相の優柔不断に憤慨している様子が伺える。三一―二七「各新聞社へ依頼状扣へ」は、各新聞社へ国体館建設に関

する援助を感謝するとともに、今後の援助をお願いする内容のものである。三一―二二および三一―二二―二三では、「憲政発祥地デアリ最高聖跡タル」日比谷議事堂跡に国体館を建設するべきことを滔々と述べている。

三一―二二―三二「御願」は林銑十郎首相にあてたものである。この中で上泉は、先の岡田・広田両内閣において国体館建設に関する交渉がかなり進捗しており、林内閣においてもいままでの経過を理解の上、協力を御願いしたい旨を述べている。三一―二二―三三「通信省庁舎建築敷地ニ関スル件」は、議事堂跡地に通信省建設が決定された直後のもので、大蔵省において決定に至る経過を確認した際の内容をまとめたものである。三一―二二―三六「国体館建設建議経過ニ関スル報告書」および三一―二二―三八「第二号国体館建設建議経過ニ関スル報告書」は、国体館建設建議の提出からその後の経過を報告書としてまとめたものである。三一―二二―四一「国体館建設趣旨」は、広田内閣成立後、議会に対して提出されたものである。この中で上泉は、先の内閣において国体館建設計画に関する話し合いがスムーズに進んでいたことを強調し、引き続き今後も「御同情御賛成」および「御声援」をお願いしたいと申し入れている。三一―二二―四六「国体館建設費捻出案」は、「国体御守切手」

を発行し、その収益を国体館建設費用にあてようとする案の骨子を記したものである。企画の内容から収益の概算までが記されており、建設費用調達に苦慮していた様子が伺える。

四 軍縮関係

大正一五年に海軍を退役した上泉は、海軍OBとして、軍縮国民同志会や同様に軍縮に反対する右派グループとともに活動を展開した。上泉は軍縮国民同志会主催の国民大会で熱弁をふるい、また条約に批准しないよう請願を上奏するなど、軍縮反対派として奔走していた。その当時の上泉の活動の一端を伺わせるエピソードが『上泉伝』に紹介されている。ロンドン軍縮条約調印後、当時首相であった浜口と上泉がある宴会で同席した際のことである。上泉が「霞ヶ関の軟弱外交は怪しからん、軍縮会議のさまは何だ、国民大会を開いて決議文を首相につきつけるつもりだ」と浜口に詰め寄ったところ、浜口はやや辟易しつつも「大いに国民の志気を鼓舞してもらいたい。しかし首相官邸の焼酎だけは御免蒙りたいですね」とあつさり受け流したという。ロンドン軍縮に際し、上泉がかなり強硬に軍縮反対を

主張していたことが伺える。

軍縮関係の文書には、海軍軍縮同志会、軍縮国民同志会などが発行したパンフレットや各種印刷物などが多く含まれているが、統帥権問題に関する文書およびパンフレット類は今回は割愛した。

四―二「秘・奇怪なる牧野内大臣及び鈴木侍従長の行為」は、ロンドン軍縮条約調印前後に出回ったいわゆる怪文書のひとつである。鈴木貫太郎侍従長は条約調印のため、活発な根回し工作を行ったが、こうした行為は当然軍縮反対派の反発を招いた。この怪文書は鈴木侍従長のみならず、牧野伸顕内大臣をも痛烈に批判する内容となっている。

四―五以下のメモ類は、同士である右派グループらとの会談の内容などが記されたものであるが、いずれも条約調印を進める政府の弱腰を非難し、国防上対米七割が最低ラインであることを強調する内容となっている。

五 手帳・日記

手帳類は昭和に入ってからのものがほとんどであり、断片的なものが多い。海軍関係の走り書きや住所録のようなものがいくつかみられる。日記も昭和に入ってからのも

が多く、また断片的なものがほとんどで、連続して書かれているものは例外的に五―二―三「第三革命日記」と五―二―一三「大陸旅行記」、五―二―一七「欧州露紀行」の三点のみである。

五―二―三「第三革命日記」は第三革命前後の上泉の活動を詳細に記したものである。満州及び日本国内での上泉の行動および面会者などが大正五年五月から翌六年二月にわたり記されている。袁世凱の死およびその後の混乱、パプチャプ軍の後始末に関して詳述されており、貴重な新史料である。

五―二―一三「大陸旅行記」は上泉伝にも一部掲載されているものである。上泉は明治三十一年に英国で建造中の軍艦敷島回航委員を命じられて英国に出張したが、英国滞在中、オランダ、ドイツ、ロシア、トルコ、オーストリアなどの諸国を視察して回った。この旅行記はその際視察した各国の事情を記録したものである。

IV 文書目録

一 中国革命関係

一一一 辛亥革命関係

一一一一一 辛亥革命関連メモ

明治四四年

一一二 第三革命関係

一一二一一 「秘・石井外相ト会見顛末」

大正五年六月

一一二一二 「時事鄙見」

大正五年四月五日

一一二一三 第三革命関連メモ

大正五年頃

宮島大八記
寺西の談話

一一二一四 第三革命関連メモ

大正五年頃

右派グループ

一一二一五 第三革命関連メモ

大正五年頃

南北分立論

一一二一六 第三革命関連メモ

大正五年頃

中国の状況

一一二一七 第三革命関連メモ

大正五年頃

清帝訪問

一一二一八 第三革命関連メモ

大正五年頃

革命状況

一一二一九 第三革命関連メモ

大正五年頃

寺内内閣の対中政策

一一二一〇 第三革命関連メモ

大正五年頃

パプチャブ関連

一一二一一 第三革命関連メモ

大正五年頃

一一二一二 肅親王よりの電報

大正□年五月二〇日

二 日清戦争・日露戦争関係

二一 日清戦争関係

二一〇一 日清・日露戦争回顧メモ

二一〇二 「日清戦争思出」

昭和九年頃

日露戦三〇周年

明治二七年六月から二八年五月

二一〇三 黄海海戦メモ

明治二七年九月二〇日

筆者不明(判読不可)

二一〇四 「凱旋ニ付スベキ事」

明治二七年

二一〇五 東郷大将より日本海海戦信号揮毫来歴自傳

明治四〇年頃

二一〇六 「日本海海戦一周年ヲ迎ヘテ」

明治三九年五月

二一〇七 日清戦争関連メモ

明治元年から二七年

二一〇八 黄海海戦メモ

明治

二一〇九 日清戦争関連メモ

大正

二一一〇 日清・日露戦争関連メモ

明治

二一一一 日清・日露戦争回顧メモ

二一一二 日清・日露戦争関連メモ

二一一三 日清・日露戦争演説草稿

二二 日露戦争関係

二二〇一 「夜話ノ秘」山本海相との談話要領

明治三六年五月一二日

二一〇二	日露戦争回顧メモ	明治三六年から三八年
二一〇三	日露戦争回顧メモ	明治三七年二月八日
二一〇四	日露戦争関連メモ (断片)	明治三七年
二一〇五	日露戦争関連手帳	大正
二一〇六	日露戦争回顧メモ	大正
二一〇七	日露戦争回顧メモ (ノート)	昭和一二年頃
二一〇八	日本海海戦回顧メモ	
二一〇九	「山王ノ三河台ニテノ話」	明治
二一一〇	日本海海戦回顧メモ	
二一一一	「旅順ニテ乃木將軍ニ別レ東郷大将ニ約意セシ 時ノ次第別記」	
二一一二	日露戦争講和関連メモ	
二一一三	日露戦争関連原稿	
二一一四	北清事変・日露戦争回顧メモ	
三 国風会・国体館関連		
三一 国風会関連		
三一〇一	「国風会仮事務所」	大正一五年五月二五日
三一〇二	「大日本主義、我国建国大精神」	
三一〇三	「寄附ニ関スル要所入」	大正
		震災関連

- 三一—四 「満川亀太郎君来訪政党其他ニ関シ御説明下サル」 昭和六年一〇月六日
- 三一—五 「日本之国是ヲ確定セラレル事ヲ希望ス」 昭和一七年?
- 三一—六 永井通信大臣関連メモ 昭和一〇年
- 三一—七 「理由」 謄写 昭和?
- 三一—八 国風会演説メモ
- 三一—九 「国風会宣伝数へ歌」
- 三一—〇 三菱商事との会談
- 三一—一 新聞社関連メモ
- 三一—二 国風会関連パンフ 印刷 大正一二年一月二五日
- 三一—三 「横須賀市国風会支部往復書綴」 大正一二年以降
- 三一—四 「横須賀市国風会支部雑書綴」 大正一二年以降
- 三一—五 「国民よ時勢に目覚めて」 印刷 大正一二年
- 三一—六 「国風会覚書」 冊子 大正一二年
- 三一—七 「国風会入会人名控並ニ記事」 冊子 大正一二年
- 三一—八 「国風会報告」 印刷 大正一三年九月一日
- 三一—九 「教化団体連合会幹事」 謄写 大正一三年一月三日
- 三一—二〇 「全国教化団体代表者大会ニ於ケル加藤総理大臣祝辞」 謄写 大正一三年一月一〇日
- 三一—二一 「国風会要覧」 印刷 大正一五年七月
- 三一—二二 「教化団体連合会」 謄写 大正?
- 三一—二三 国風会関連書類 印刷 大正

「上泉徳弥関係文書」 解題及び目録

三十一―二四	「東京府教化団体連合会総会」 謄写	昭和六年六月二日
三十一―二五	「国風会趣意書」 印刷	昭和六年九月二九日
三十一―二六	「一水会出席者」 印刷	昭和六年二月二日
三十一―二七	「国体擁護連合会からの案内」 印刷	昭和八年一月二五日
三十一―二八	「国風会一〇周年記念大会関連書類	昭和五年
三十一―二九	「国風会会員手帳」 印刷	昭和九年二月
三十一―三〇	「星桜会出席者名簿」 印刷	昭和九年十一月八日
三十一―三一	「国風会声明書」 謄写	昭和一六年六月二日
三十一―三二	「武田範之追悼法要案内状」	昭和一二年六月一日
三十一―三三	「一水会九月例会出席者」 印刷	昭和一三年九月二日
三十一―三四	「昭和研究会名簿」 皇道日報	昭和一五年一月一日
三十一―三五	「第一三回全国教化連合団体代表者大会ニ於ケル答申並ビニ決議」	昭和一一年一月
三十一―三六	「国風時報」 新聞	昭和一〇年七月二日
三十一―三七	「国体明徴達成連盟要望」	昭和一〇年九月二七日
三十一―三八	「大日本主義」 贈呈先リスト	昭和
三十一―三九	「国風会本部並ニブラジル支部事業」 謄写	昭和
三十一―四〇	「国風大観発刊趣旨」 印刷	
三十一―四一	「国風会従業職員名列」	
三十一―四二	「国風会趣意書」 印刷	
三十一―四三	「国風会関連書類（パンフ、封筒など）」	

三一—四四	「教化団体懇談会出席者名簿」謄写	
三一—四五	「国風会員芳名録 第三号」冊子	
三一—四六	日清戦争慰霊祭演説草稿	昭和一〇年頃
三一—四七	日伯青少年総会 演説草稿	昭和一〇年一〇月三日
三一—四八	「日清戦後殉没者慰霊祭並ニ遼東還付四〇周年記念講演会ニ関スル放送案」	昭和一〇年
三一—四九	「国風会長上泉海軍中将ノ演説原稿」	昭和
三一—五〇	「紀元二千六百年ヲ迎ヘテ」	昭和
三一—五一	民政党北田応援演説草稿	昭和
三一—五二	演説草稿(断片のみ)	昭和
三一—五三	「国風会長上泉海軍中将挨拶」	
三一—五四	挨拶原稿	昭和
三一—五五	演説草稿	昭和
三一—五六	決議案草稿	昭和
三一— 国体館建設関連		
三一—一	「森氏ニ面会シ節談話原稿」	昭和九年前後
三一—二	「斉藤伝資料」	昭和一二年六月七日
三一—三	国体館関連メモ	昭和一一年一月一七日
三一—四	「阪谷男へ報告ノ際」	昭和一〇年四月から六月
三一—五	「横関君へ電話シ控」	昭和一六年一月七日?

「上泉徳弥関係文書」解題及び目録

三二二一六	国体館関連メモ	昭和一六年一月一六日
三二二一七	「牛場秘書官へ口上」	昭和
三二二一八	国体館関連メモ	昭和一五年頃
三二二一九	国体館関連メモ	昭和
三二二二〇	国体館関連メモ	昭和
三二二二一	「国体館建設二付」	昭和
三二二二二	「歌田局長ト電話案」	昭和
三二二二三	国体館関連メモ	昭和
三二二二四	「国体館二付話ス材料」	昭和
三二二二五	国体館関連メモ	昭和
三二二二六	「各新聞社へ依頼状扣へ」	昭和一六年
	国体館関連メモ	昭和
	「石田秘書官ノ質問」	昭和
	「不要 原稿ノ下書き 雑」	昭和
	国体館関連メモ	昭和
	国体館関連メモ	昭和
	「第一回文相ト会見」	昭和□年六月五日
	国体館関連メモ	昭和
	国体館関連メモ	昭和

三二二二七	国体館関連メモ (断片)	昭和
三二二二八	国体館関連メモ	昭和
三二二二九	国体館関連メモ	昭和
三二二三〇	「国民大会講演」	昭和
三二二三一	国体館関連メモ	昭和
三二二三二	「御願」 謄写	昭和二年二月九日
三二二三三	「通信省庁舎建築敷地ニ関スル件」 謄写	昭和二年三月一九日
三二二三四	『米沢新聞』 記事	昭和五年一月九日
三二二三五	『愛国新聞』 記事	昭和五年一月一〇日
三二二三六	「国体館建設建議経過ニ関スル報告書」 謄写・	昭和五年
	冊子	
三二二三七	「近衛首相ヘノ書簡ニツイテノ説明」 謄写	昭和一五年
三二二三八	「第二号国体館建設建議ニ関スル経過報告書」	昭和一六年
	印刷	
三二二三九	「文部省ノ不可解ナル行為」 謄写	昭和二年六月二一日
三二二四〇	「文部省ノ不可解ナル行為」 書き込みあり	昭和二年六月二一日
三二二四一	「国体館建設趣旨」 謄写	昭和二年五月二四日
三二二四二	国体館関連メモ 謄写	昭和二年五月二四日
三二二四三	国体館関連書簡 謄写	昭和二年五月四日
三二二四四	「仮議事堂跡記念施設ニ関スル建議案」 謄写	昭和二年五月一九日
三二二四五	「紀元二千六百年ヲ記念シ教化団体トシテ計画	昭和

実施すべき適切ナル事項如何」謄写

三一―四六

「国体館建設費捻出案」謄写

昭和

三一―四七

「帝国議事堂跡ニ国体館建設ノ件」印刷

昭和

三一―四八

「意見書案 帝国議事堂跡ニ国体館建設ノ件」印刷

昭和

三一―四九

国体館建設費捻出案の下書き

昭和

三一―五〇

挨拶草稿

昭和

四 軍縮関係

四―一 「日英米三国軍縮会議ニ関スル講演大会聴講券」印刷

昭和二年七月十一日開催

印刷

四―二 「秘・奇怪なる牧野内大臣及び鈴木侍従長の行為」謄写

昭和五年頃

為」謄写

四―三 「軍縮国民大会」印刷

昭和五年四月三日

四―四 「報告書(第二回)」海軍軍縮同志会、印刷

昭和五年三月一八日

四―五 ロンドン軍縮関連メモ

昭和五年四月

四―六 ロンドン軍縮関連メモ

昭和五年

四―七 海軍軍縮国民同志会の声明

昭和五年

四―八 ロンドン軍縮関連メモ

昭和五年?

四―九 ロンドン軍縮関連メモ

昭和五年?

五 日記・手帳

五一一 手帳

- 五一一一 手帳 (野外要務令に就て)
- 五一一二 手帳 大連要港部時代
- 五一一三 手帳
- 五一一四 手帳
- 五一一五 手帳
- 五一一六 手帳 (国防婦人会)
- 五一一七 手帳
- 五一一八 手帳
- 五一一九 手帳 (服従定則、内務曹)
- 五一二〇 手帳
- 五一二一 手帳
- 五一二二 手帳
- 五一二三 手帳
- 五一二四 手帳 (住所録)
- 五一二五 手帳
- 五一二六 手帳 (欧州各国事情)

明治二七年四月

昭和五年から七年

昭和元年

昭和九年

昭和一二年

昭和一年

昭和一〇年九月

「上泉徳弥関係文書」 解題及び目録

五二二	日記		
五二一	日記	明治一七年	
五二二	日記	八月一〇日から二〇日	
五二一三	第三革命日記	大正五年五月二〇日から	
		六年二月二日	
五二一四	日記	大正六年一月から八年	
		八月	
五二一五	日記(断片)	昭和六年	
五二一六	日記	昭和二五年	
五二一七	日記	昭和一五年	
五二一八	日記	昭和一〇年六月一日	
五二一九	日記	昭和一〇年	
五二二〇	日記(断片)		
五二二一	履歴及び日記	明治四二年	
五二二二	日記・覚書	明治四五年から昭和二〇	
		年(断続的)	
五二二三	「大陸旅行記」	明治三二年五月	
五二二四	日記	大正一三年から一四年	
五二二五	自筆雑記ノート	大正から昭和	
五二二六	日記	昭和?	
五二二七	「欧州露紀行」		

写真あり

「略歴」(上泉文書 略歴の原典の一部より)

本籍 山形縣米沢市本五十騎町四八八六番地
現住所 神奈川縣逗子町久木三四九番地
出生地 米沢市袋町
族籍 士族

上泉徳彌

慶應元年九月二十五日生

明治十五年九月八日 海軍兵学校生徒申付ラル

明治十八年秋兵学校ニ於ケル学術科程ヲ卒ヘ練習艦

筑波ニテ実地航海トシテ内地巡航同十九年二月ヨリ遠

洋航海トシテ豪州、新西蘭土、「フィジー」「サモア」

布哇等巡航

〃 十九年十二月七日 海軍少尉候補生拜命軍艦浪速乗

組ヲ命セラル

明治二十年軍港決定ノ為メ内閣總理大臣兼外務大臣

伊藤博文伯(多分此頃ハ伯ナリシナラン) 大山陸軍大

臣、仁禮海軍中将、吉井宮内次官等浪速ニ便乗関西及

九州方面ヲ巡視セラレタルコトアリ此時伊藤伯ノ艦内

ニ於ケル動作ニ軍艦内規ニ抵触スルモノアルヲ憤リ後

艦橋ノ副直將校勤務中遠州灘ニ於テ大渴一声伯ヲ叱咤

シテ喫煙中ノ葉巻煙草ヲ海中ニ投セシメタルコトアリ

此年英照皇太后陛下浪速ニ乗御伊勢太廟ニ行啓アラ

セラレタリ

〃 二十一年一月十三日 任海軍少尉 補武蔵分隊士

〃 二十二年五月十五日 補鳳翔航海士兼分隊士

〃 二十二年八月二日 海軍大学校丙号学生被仰付

〃 二十三年七月七日 葛城分隊長心得被仰付

二十三年ノ第一帝國議會ニ於テ剩余金六百万円ヲ生

シ各省ニテ之ヲ分ケ取りセント發勢アルヲ以テ全部之

ヲ海軍擴張費ニ充当スルベシトノ意見書ヲ海軍大臣以

下前海軍將官連各宛ニテ提出シタル事アリ

將ニ帰途ニ就カントスル丁徐章ノ率ユル支那北洋艦

隊ヲ長崎ニテ歡迎シ彼等ニ好感ヲ與ヘタルコトアリ

海軍進級條例改正ニ際シ海軍大臣ノ所置ヲ難シタル

意見書ヲ海軍大臣以下前海軍將官連各宛ニテ提出シ大

ニ物議ヲ来シタルコトアリ

〃 二十四年十二月四日 任海軍大尉

〃 二十六年四月十一日 補高千穂分隊長

- 〃 二十六年十一月二十四日 補佐世保海兵団分隊長
- 〃 二十七年三月一日 海軍大学校学生被仰付
- 〃 二十七、八年戦後ニハ運送船監督將校呉鎮守府参謀、大連灣要港部副官、龍田分隊長トシテ従軍ス、功ニ依リ勲六等旭日章年金七十円ヲ賜フ
- 〃 二十九年四月六日 海軍大学校学生被仰付
- 〃 三十年十二月一日 任海軍少佐
- 〃 三十一年七月三十日 補鎮遠水雷長兼分隊長
- 〃 三十一年十月一日 補八重山副長
- 〃 三十一年十一月二日 英国ニテ製造中ノ軍艦敷島廻航委員ヲ命セラル
- 在英中和蘭、獨乙、露西亜、土耳其、澳地利、「ハングアリー」、伊太利、仏蘭西ノ諸國ヲ巡視ス
- 〃 三十三年四月十七日 敷島水雷長ニテ帰
- 〃 三十三年六月七日 補秋津洲副長
- 北清事件ニ際シ白河ニ於テ陸軍ノ運輸事業ニ従事ス、功ニ依リ功四級金シ勲章及年期五百円ヲ賜フ
- 〃 三十四年六月四日 補竹敷要港部第一敷設隊司令兼第二敷設隊司令
- 〃 三十五年三月十三日 補高砂副長
- 英國皇帝「エドワード」七世陛下ノ戴冠式ニ参列ノ賜フ
- 〃 三十八年一月十二日 (戦役方二年目) 任海軍大佐
- 〃 三十八年十二月二十九日 補浪速艦長
- 〃 三十九年四月一日明治三十七、八年戦役ノ功ニヨリ功三級金鷄勲章並二年金七百円及勲三等旭日中綬章ヲ賜フ
- 〃 三十六年四月十二日 補海軍々令部副官
- 〃 三十六年中ハ大ニ露國ニ対シ開戦論ヲ主張セリ
- 〃 三十七、八年戦役中ハ海軍参謀トシテ大本營ニ在リテ主トシテ鉄道船舶ノ運輸業務ニ従事セルガ陸海軍連合作戦ニテ上陸等ノ際ハ各方面ニ出張セリ樺太占領ノ際ニモ出張シ「アレキサンドロフスク」占領ニ当リテ献策センコトガ採用セラレ同所ノ棧橋ガ無難ナリシ為メ陸海軍相談ノ上上泉棧橋ト命名セラレタリシガ講話談判ニテ北緯五十度以北ヲ露國ニ変換セラレタルハ今尚ホ遺憾ニ思フトコロナリ
- 同戦役中 明治天皇陛下ニ御座所ニテ兩度皇太子殿
- 下ニ三度戦況ヲ奏上セリ
- 〃 三十八年四月一日明治三十七、八年戦役ノ功ニヨリ功三級金鷄勲章並二年金七百円及勲三等旭日中綬章ヲ賜フ

韓国及清國警備ニ従事ス

三十九年初夏統監伊藤侯ヲ朝鮮ヨリ神戸ニ便乗セシム其際侯ハ船中ニテ余ニ語テ曰ク先年君ガ少尉候補生トシテ本艦ニ乗組居ラレ大ニ君ヲ叱ラレタルコトアリ今日ハ艦長トシテ余ヲ便乗セシメラル当時ヲ追憶シテ感慨甚ク深キモノアリト蓋シ其時ノ巡航中余ハ神戸ニ於テ浪速ガ帰途土佐ニ寄港ノ際伊藤総理大臣ニ対シ不穩ノ計画アル由ヲ仄聞セルヲ以テ磯邊艦長ヲ経テ窃ニ警告スルトコロアリ艦長ヨリ褒メラレタルコトアリタリ其ノ為メナルヤ否ヤヲ知ラザルモ帰途予定ヲ變更シテ鹿児島ヨリ東京湾ニ直航セリ今日之亦感慨ノ一部ナランカ又將來再ビ國ヲ賭シテ開戦セントスルコトアリタル場合ニ関シ懇切ニ訓諭セラルトコロアリタリ其意ハ此度ノ日露戦争ハ誠ニ好結果ニアリ仕合ナリシモ今后ハ有力ナル見方ヲ有セスシテ単独ニ開戦スル勿レト云フニ在リタリ尚又対支意見ヲ述テ曰ク今後ハ絶対ニ日清同盟シテ世界ニ當タルノ必要アルニ付今度露國ヨリ取りタル旅順口ハ清國ニ還與シ極力援助シテ其後興ヲ急ガシメ同時ニ先年獲得セル鎮遠オモ還付シテ北洋艦隊ヲ再興セシムベシ但シ旅順軍港ハ日本軍艦ニ対シテハ自國軍艦同様出入り自由タラシムルコト云々退

艦ニ際シ記念トシテ金時計一個ヲ贈ラルル后天賞堂ニ命シテ次ノ如ク彫刻セシメラル其際統監府高崎安彦君告テ曰ク時計ハ侯カ先生渡歐ノ節「スエツツル」ニテ二百八十余円ニテ購入セラレタルモノナリト蓋ノ内面ノ彫刻文左ノ如シ

今茲丙午初夏蒙 招待

列凱旋觀兵式從韓都掃國

搭乘浪速艦因此金表一枚

留贈艦長上泉大佐

永用為念明治三十九年四月

統監侯爵 伊藤博文

〃三十九年九月十二日 伏見宮博恭王殿下清國へ御差遣ニ付隨行被仰付(當時殿下ハ浪速ノ副長ヲ勤メ居ラレタリ)

出発前天皇皇后兩陛下ニ御座所拜謁仰付ケラレ其際皇后陛下ヨリ「博恭ハイカエ世話ニナリ居ル由」トノ御礼ノ御言葉續テ「北京ハ大變ニ氣候ノ悪キ所ノ由ニ付能ク健康ニ注意スル様ニ」トノ優渥ナル御沙汰ヲ拝シ臣下シテ実ニ恐懼感泣ニ堪ヘザルモノアリタリ

清國ニ於テハ光緒帝及西太后兩陛下ニ拜謁二等第二龍寶星勲章ヲ賜リ又清國政府ハ非常ナル優遇ヲナセリ

帰途天清ニテ総督袁世凱ハ歓迎ノ宴ヲ催シ芝居ノ餘興アリタリ

三十九年十二月二十四日 補吾妻艦長

伊藤侯ヲ往復二度朝鮮ニ便乗セシム

年月日ハ忘レタルモ明治四十年カ若クハ四十一年ノ

事ナリ、軍艦吾妻ニ便乗シテ朝鮮ニ帰ラントスル伊藤

侯ハ馬関ニ上陸シテ春帆楼ニ宿泊セル儘艦ハ出港ヲ急

クニモ拘ラズ容易ニ帰艦ノ模様ナキヲ以テ伊集院司令

長官ト共ニ春帆楼ニ行キ出艦ヲ強要セルヲ以テ止り得

ズ翌朝帰艦大連錨地ヲ出港シ白洲燈台ヲ左舷ニ見テ通

過シ予定ノ如ク釜山ニ向ケ変針セントセシ際前艦橋ニ

在リタル侯ハ突然艦長仁川仁川ト 仁川行キヲ要求セ

ラレ依テ長官ノ許可ヲ得テ仁川ニ直航上陸セシメタル

事アリ航行中侯笑テ曰ク朝鮮ニテハ余ノ帰途ヲ要シテ

不穩ノ計画ヲナシ居ルモノガアルカラ彼等ノ裏ヲ搔テ

ヤルナリト又曰ク我輩ニ対シ何人が如何ニ秘密ニ計画

スルモ二人以上ニテ相談セルモノナラバ必ズ我輩ノ耳

ニ入ラヌコトナシ唯何人ニモ相談セズ単独ニテ決心シ

来テ余ヲ刺スモノアラバ之ハ予防方法ナシ云々ト此行

侯ハ内地及朝鮮ノ全新聞ニ何日何時何所出発何日何時

釜山着何時発汽車ニテ何時京城着ト普ク宣シ在リタル

為メ裏ヲ搔カレタルオモ知ラズ時刻ヲ測リテ大邱付近

ニテ鐵路ヲ爆破セシコトアリタリ後年「バルピン」ニ

テ遭難セラレシハ或ハ当時侯ノ心中警戒ヲ懼ルモノア

リシヤモ知レザレモ豫々覚悟セラレアリシ天命ト云フ

ヲ得ベキカ

韓國警備中韓國皇帝陛下並ニ大院君ニ拜謁二等八卦

勲章ヲ賜フ

四十二年八月二十六日 補生駒艦長

米國世界一周艦隊ヲ横濱ニテ接待ス

四十二年十一月二十日 免本職補横須賀海軍工廠織

装員

四十二年一月十五日 補薩摩艦長兼横須賀工廠織装

員

蓋シ軍艦薩摩ハ当時世界一ノ優秀艦ニシテ其第一世

艦長ヲ拜命シ頗ル得意ナリシナリ

四十二年十二月一日 任海軍少將 補大湊要港部司

令官

四十四年九月二日 補鎮海防備隊司令官兼臨時海軍

建築支部長

四十五年七月九日 補横須賀水雷團長（之ハ中将若

クハ少將ノ位地ヨリ少將若クハ大佐ノ位地ニ左遷セラ

レタルモノナリ)

大正二年四月一日 補横須賀水雷隊司令官

驅逐隊ヲ率ヒ静岡灣へ廻航ノ際沼津御用邸ニ於テ皇

太子殿下ニ拝謁ス

〃 二年八月十日 補第一艦隊司令官

〃 二年九月二日 海軍小演習青艦隊司令官被仰付

〃 二年十一月十五日 補佐世保水雷隊司令官

〃 二年十二月十日 待命被仰付

〃 三年八月二十三日 独国ト開戦

〃 三年十二月一日 任海軍中將

〃 〃 〃 豫備役被仰付

離現役以後

大正四年一月十一日 叙従四位(特旨叙位ナリ)

〃 四年三月十九日 両陛下葉山御用邸ヨリ東京へ還御

ノ際、逗子停車場「ホーム」ニ整列奏送中村松侍従武

官突然列車ヨリ出て来リ写真ヲ添へテ揮毫ヲ奉呈セヨ

トノ御沙汰ナリトテ勅命ヲ傳達セラレテ御召列車ハ

直ニ発車セリ翌々二十一日宮内省ヨリ絹布二枚ヲ送り

来タルヲ以テ恐懼感激シツツ次ノ詩ヲ揮毫シ四月一日

参内シテ侍従武官長ヲ經テ写真ヲ添エ奉呈セリ

二千五百有

余年萬世

皇家一系傳

統治全球因

帝徳金輪普

照十方天

海軍中將上泉徳弥謹書

右詩ハ私ガ明治三十九年ノ暮己ノ候スル大日本主義

ニ基キ「日本ノ國是千年計画」ナルモノヲ認メ始メ之

ヲ伊藤侯ニ提出セント欲セシモ先ツ東郷大将ニ示シテ

意見ヲ求メタルニ大将ノ不賛成ニ遇ヒタツヲ以テ提出

ヲ見合ハセ其底深ク秘藏シアリシガ数年后之ヲ宮島大

八君ニ示シタルニ同君曰ク君ノ后此ノ如キ秘書ヲ発見

スルニ至ルモ世ヲ益スルニ足ラズ須ク信スルトコロノ

先輩ニ示シ置クラ可トスト大ニ勧誘セラレタルヲ以テ

遂ニ先輩五氏ニ示スニレルモノナルガ宮島君ハ其千年

計画ノ意見ヲ詩ニ作り呉レラレタルモノナリ示セル

人々ハ山縣公、井上侯(馨)、樺山大将、井上元帥、

平田伯ノ五氏ナリ

山縣侯曰ク我輩モ日本國ノ為メニ考ヘテ居ルコトハ

敢て人後ニ落ザル積ナリシモ閣下ノ如ク年限ヲ定メテ
計画スルヲ得ザリシト驚嘆セラレタリ

樺山大将ハ賛意ヲ表シテ曰ク此千年計画ヲ実行シ得
ル外務大臣ヲ見出スニ至レバ之ヲ示サンソレ迄ハ御預
リ致シ置クベシト

奉呈後松村侍従武官ヨリ聞クトコロニヨレバ逗子駅
ニテ勅命下ル際陛下ニハ急ニ松村武官ヲ召サレテ彼所
(アソコ)ニ餅原ト(餅原海軍中將ノ事ニテ中將ハ長
白ノ髯ヲ有シ一見直ニ識別シ得ル人ナリ)酒好キノ上
泉ガ居ルカラ兩人ニ写真ヲ添ヘテ揮毫ヲ差出ス様命セ
ヨトノ御沙汰アリタル由ナリ其後仄聞スルニ陸海軍將
官ニシテ揮毫奉呈ノ御沙汰ヲ蒙リシモノ陸海軍各十一
名位ナラントノコトニテ微臣ノ揮毫ハ巻物ニ作ラレ宮
中ノ御蔵ニ納マリ在ル由(横ニ長ク書キタル為ナラ
ン)

後年山縣公ニ「統治全球因帝徳」ノ意味ニ関シ幸機
ヲ見テ陛下ニ能ク説明シ置カレンコトヲ頼タルニ公ハ
之ヲ快諾セラレアリシモ其結果ヲ伺フノ機會ヲ得スシ
テ終レリ前記「日本ノ國是千年計画」ハ世界ノ物議ヲ
来スモノナルヲ以テ世間ニ発表スルヲ得ザルモノナリ

大正三年暮　ヨリ川島清次郎君ト共ニ雜誌大日本ヲ発行

シテ大ニ海軍拡張ヲ主張セリ(九カ年間)
大正五年　「 PAPU CHAP」ノ腹壁ウインドウニ参与ス

其當時一日旅順口肅親王邸ニ於テ親王モ同席余ト憲
徳公ト囲碁最中関東軍參謀長西川虎次郎大佐ヨリ電話
ニテ袁世凱毒殺サラルト通知シ来ル三人啞然タリ

親王頗ル狼狽ノ氣味ニテ先ツ宣統帝ノ安否ニ付余ノ
意見ヲ求メラル余答テ曰ク袁世凱ノ毒殺ガ事実ナラバ
帝ハ多分安然ナルベシト

親王曰ク自分モ多分然ルナラント思ヘドモ陰謀ガ家
底内ニデモ在ルモノトセバ何所ニ如何ナル事件ガ突発
スルヤ測ルベカラズト余ハ不思議ノ感ニ打タレタリ親
王又曰ク袁世凱ノ死ハ仮ニ毒殺ニ非ストスルモ自分ハ
先年来彼ハ餘リ長生セザルベキヲ洞察シ居リ曰ク何ト
ナレバ彼ハ大ニ肥満シテ歩行躑躅ノ状アリタレバナリ
云々

於是余ハ親王ニ問テ曰ク今後支那政界ニ活躍スル人
ハ何人ナルカト親王答テ曰ク恐ラク段祺瑞ナラント
肅親王ノ書翰　封筒表上泉將軍　裏ノ封ハ蒙古
字

上泉將軍閣下数年以來諸承

助力私哀銘感莫可名言日昨奉到

手書并

惠寶刀

期許之言十分慚謝不敢當也迺來我輩

東局面風雲日迫弟棉力薄材深懼不易

肩此鉅任叩求屈時

惠然肯來相助為理使弟少隕越之虞

則銜感上達祖宗世人亦

伏義不逞弟一家一姓已也去歲小兒在

東京皆已陳明之不再叙專謝近日

臂助之情叩在同志均希

心照為叩此請

助安

善著 百叩

「バブチャブ」モ己ニ蒙古ニ引上タルヲ以テ大正五年暮北滿並ニ北支ヲ視察シテ帰國セシニ寺内首相ヨリ

一日來テ支那話ヲセヨトノ命アリタリ

依テ日時ヲ約シテ高樹町ノ私邸ニ行キタルニ首相ハ

当日門ヲ鎖シテ一切ノ來客ヲ謝絶シ午前八十一時ヨリ

昼迄話シ午食后庭園内散歩ノ后再ヒ夕刻ニ至ル迄終日

談話セリ此日余ハ三十三カ条ノ意見ヲ書キ付ケ行キ之

ヲ述ベタルガ其内ニ滿州ニ於ケル四頭政治ノ不都合ヲ

難シ露國ノ極東太守ニ倣ヒ関東都督ニ至大ノ權力ヲ與

ヘテ大ニ活躍セシムベシトノ論ニハ大ニ賛意ヲ表セラ

レシガ其后都督ニ兵権ヲ與テ権限ヲ拡大セラレタリシ

モ他ノ内閣ニテ又改正セラレタル様ニ記憶ス

大正六年 大日本主義ヲ主唱シツツ東北、北海道地方ヲ

遊説シ海軍張ヲ主張ス

大正七年 「大日本主義」ヲ著述シ海軍擴張ヲ主張ス

大正九年ヨリ 神奈川縣逗子小学校ノ児童保護者會々長

トナル

大正十年ヨリ 梨羽男爵、江藤副會長、故山本理事其他

ノ熱誠ナル進メニヨリ教化団体国風會ノ會長トナリ各

地ヲ遊説シ又「大日本ノ建設」ナル著書ヲ二回、「國

民よ奮起せよ」ヲ著作ス

大正十年九月二十五日 後備役

大正十五年九月二十五日 退役

昭和二年ヨリ 神奈川縣三浦郡ノ教育會會長トナル

昭和四年 京都ニ於ケル御即位式ニ參列ス

昭和十年 国風會々長トシテ來ル昭和十五年ノ紀元二千

六百年ニ於ケル記念事業ヲ計画シテ政府ニ建議シ其第

一期事業トシテ日比谷議事堂跡ニ國體館ヲ建設セント

欲シ目下熱心奔走中ナリ

昭和十五年七月二十六日 内閣直屬紀元二千六百年奉祝

附記

父ヲ清次郎ト云ヒ米沢随一ノ貧家ニ生シ幼児自家ニ燈油ナク母ノ里方ノ女中ガ裁縫シ居ル行燈ノ後方ニ漏ル燈光ヲ借テ讀書セル由ナルモ大学者トナリテ藩校興讓館ノ教授ト成レリ怪傑雲井龍雄及義兄直藏ハ門弟中ニ於ル最モ愛スル兩人ナリシガ晩年ニ至ル迄実子ナキヲ以テ義兄ヲ養子トナシ孫迄生レタル後妻病没シ母ヲ後妻ニ迎ヘ余ノ生レタル翌年死亡セリ母ノ名ヲ安ト云フ

義兄ハ世間ヨリ聖人ト云ハレタル程ノ人格者ニシテ極貧ノ中ニ在リテ義弟ノ教育ニ全力ヲ傾注シ呉レタリ余ノ今日在ルハ全ク義兄ノ賜ニシテ父母ニモ勝ルノ恩アリト云ハザルベカラズ義兄モ亦漢學者トシテ長年月間米沢ノ教育界ニ貢獻セリ

妻ハ米沢藩士五十嵐力助ノ長女ニシテ名ヲ久子ト云ヒ長男ヲ徳正長女ヲ「クミ子」次女ヲ徳子ト云フ

有名ナル上泉伊勢守ノ血ガ私ヲ通シテ長男徳正迄連続シ居ル由ナルモ男系ノミニアラザルヲ以テ今日之ヲ明示スルコトハ困難トナレリ

昭和四年時ノ海軍省人事局長左近司海軍少將ヨリ貴官ハ離現役ノ際勲二等ノ資格ヲ有シ居ラレタルヲ以テ死亡ノ際ニ之ヲ與ヘラルルコトニ賞勲局ニ記載サレアルニ付心得置カレ度トノ話アリタルヲ以テ茲ニ記シ置ク

追加

「日本ノ國是千年計画」ノ第一期五十年計画ハ伊藤侯ガ明治三十九年軍艦浪速ニ便乘航海中私ニ話サレタル如ク旅順ヲ支那ニ還與シテ日支親善ノ端ヲ啓カントスルニ在ルモノナリシガ同年暮之ヲ東郷大將ニ示シタニ大將反對シテ曰ク縦ヒ伊藤侯ノ説ナリトモ余ハ旅順ノ還付ニハ同意スル能ハズ今後日本ハ大陸軍ヲ必要トスルゾト以テ當時ニ於ケル大將ノ意考ヲ察スルヲ得ベク長年月篋底ニ秘藏セシハ之ガ為メナリシナリ又年月ハ忘レタルガ満州問題ノ非常ニ紛糾セル時一日東郷大將ヲ訪ヒ談此問題ニ及ビタルニ大將曰ク断然満州ヲ取テ仕舞フヲ可トス然ル時ハ世界ヲ拳ケテ猛烈ナル抗議ヲ為シ来ルコト必然ナリ其際当方ハドコ迄モ議論デ頑張りドウシテモ致シ方ガナケレバ少シツツ返スコトニシテ結極最後ニ幾何カトヲ手ニ残ル様ニ為スベシ云々ト今日伊藤侯ノ日支親善策ト東郷大將ノ大陸軍案トヲ味シツツ

三十余年前ノ日露戦役直後ヲ追憶セバ感慨ニ堪ヘザルモノ
アルナリ
日清日露ノ戦役及北清事件其他種々ノ場合ニ於ケル色々ノ
追憶無キニシモアラザルモ多クハ自慢話ニ陥ルノ恐アルヲ
以テ記述セズ

終
り